

聖ヒルデガルト『フュシカ』・ミーニュ 版テキストの改善の試み

——第四書「石の書」に焦点を当てて——

塩谷元紹

ビンゲンのヒルデガルトの『フュシカ』(*Physica*)は、その豊富な博物誌的資料価値にも拘らず、今日に至る迄テキストの充実な整備を見ていない。そればかりではなく、従来のミーニュ版テキスト(PL t.197 所収〔略称M〕)が含む数多くの不備を同テキストの基礎写本である15世紀・パリ写本(P)との対照の下に摘出するという、これ迄に当然行われていてよい試みですらも、筆者の知る限り未だ世に問われたものは見当たらないように思われる。本稿は正にこうした現状に鑑み、Pとの対照の下、限られた範囲についてはあるが、Mのテキスト改善を試みようとするものである。検証の対象として選ばれるのは第四書「石の書」⁽¹⁾(Lib. IV. De lapidibus. /M. 1247-66)、併用されるテキストは『フュシカ』の13世紀・ヴォルフエンブュッテル写本(G)、及び15世紀・ブリュッセル写本(B)の中の各該当書である。

○P, G, B (何れも略称)における「石の書」各該当箇所——

P—Pariser Handschrift, Bibliothèque Nationale, Cod. lat. 6952, f. 197^r-204^r.

⁽²⁾G—Wolfenbütteler Handschrift, Herzog August Bibliothek, Cod. Guelf. 56.2

Aug. 4^o, f. 90^r-106^v.

B—Brüsseler Handschrift, Bibliothèque Royale, Cod. 2551, f. 55^r-67^r.

(1)〔凡例〕紙面の制限上、本稿で収載するM(初版〔1855年〕を使用)の不備・その他の問題箇所⁽³⁾は、Pに従って正しく改められるべき箇所等、原則としてP・M間のテキスト異同(少なくとも異同の疑いの濃い場合)を巡って摘出される箇所に限定されている(テキストがPに従っている箇所については、註における一部の言

及を除き対象外)。その他、印刷上の不備と見られる箇所では収載の必要が無いと思われるものも省略する。なお表記法上の不備については、ドイツ語単語に限り特に取り上げるものとする。

(2) 記載様式は次に従う。――

1. M各章の章数は〔〕内の羅馬数字で、序文 (Praefatio.)・各章の行数はそれぞれの最初の行から数えた行数を算用数字で示す (例えば序文は全69行/〔I〕5,8・quia は Cap. I. の5行目, 8行目両箇所の quia)。但し註では同一章に関しては行数のみを記す。なおP, G, Bについては葉数・行数は省略する。

2. a) b—Mの箇所 aはPではb。c ↓ d) e—Mの箇所 cd 間にPではeが存在。f) ×—Mの箇所 fはPでは欠如。Pの語が略字を含む場合は解読して呈示するが、必要に応じその略字を併記する場合もある。G, Bの対応箇所も適宜併記する(横線——は「石の書」における対応箇所欠如を示す)。これ等写本上のテキストを本稿で表記する際には、ラテン語単語に関しては原則としてMの表記を尊重する (例えば、二重母音 ae に対する写本上の表記 e を ae に改める等)。但し必要に応じ、写本上の表記を記す場合もある。□は未解読箇所、<>は筆者の補充を示す(<n>は写真版での省略線確認不能によるもの)。また、Pのその他の箇所(本稿本文に項目として直接掲げる以外の箇所)からの引照については、特に異同を指示しない限り、Mのテキストで呈示する。各写本のテキストの記載に当りMの語を反復する際には、不明を来さない範囲で適宜簡略に頭文字のみを呈示する。写本上の句読法については、説明の簡略化の為本稿では省略する。なおMにおけるイタリックは取り除く。

(3) 本稿執筆に際し、筆者はPの全テキスト (f. 156^r-232^r) について、Mにおけるその該当範囲との対照調査を行ったが、G, Bについては資料の入手範囲等の都合上、「石の書」の内部を中心とした調査しか出来なかったことを、ここで予め断っておく。

以下筆者は、差し当たり次のような箇所に不備・その他の問題点を指摘する(註を附さない各項目については、テキストはPに従うべきと考える)。

[Praefatio.] 9—10 • per primam inspirationem] p. p̄niam (sc. praesentiam) inspirationis/24 • glitten] gluten/33 • indurati] indurare/44 • ista] ita/45 • et utilia] ac u./51 • hominum]/58—59 • decoraverat] decorabāt (sc. decorabant)

[I] 8 • fertiles] fertilis/27—28 • sua...possit] s. g. r. ne eam u. m. p./48 • et salivam] ac s./50 • et super] ac s.

[II] 2 • mites...habet] nuc̄ (sc. nunc) illas c. h./3 • ignitus] igneus/5, 8 • quia] q̄m (sc. quoniam) /9 • in] cum/32 • der brot] der breit

[III] 4 • per inundationem aquarum] p̄ (sc. prae) inundatione a./35 • fortes fiber] fortis f./39 • quia] quoniam/47 • exiens ↓ illi] que/52 • propone] p̄pone (sc. praepone)

[IV] 5 • aliquantulum] aliq̄tū (sc. aliquantum) /7 • queckbronnen] queckbrōnen (sc. queckbronnen)

[V] 9 • quia] quoniam/10 • foetiditas] fetidas/13 • eum ipsum...tunc] cū (sc. cum) i. ...cū /16 • et indiscipli—] ac i./20 • lanchen] lancken

[VI] 22 • per nimiam oppressionem] prae nimia oppressionem/53—54 • quidquam] q̄q̄ (sc. quidquid) /54—55 • tunc...ponat] t. n. v. et eum in os s. p./57, 58 • terram] ceram/62 • ipse] iste/75—76 • viro...pranso] v. i. j. et p./77 • aut ↓ plures] per

[VII] 2—3 • cum...destruuntur] c. f. laubroz a. est in a. t. destruunt

[VIII] 7—8 • gelo ...resistit] g. c. et v. id est v. * ac feich□sse r./30 • inque molli] in m./50—51 • auferat, ↓ <, >et vinum] et eum ita madidum in purum vinum per quinque dies ponat et deinde topazium auferat/56 • absque] atque

[X] 3 • vel ↓ de] quam/10 • proponat] p̄oat (sc. ponat) /29 • gedrognuze] gedrognusze/31 • knicbeke] kintbethe/39—40 • ibidem flare serpens] idē (sc. idem) serpe⟨n⟩s f.

[XI] 8 • deicht] deick

[XII] 18 • madidus inde] i. m./19 • constantius ↓ ho —] prude⟨n⟩tius

- [XIII] 18・autem] vero/⁽²⁴⁾22・quin] quia/⁽²⁵⁾33・quocunque modo poteris] quocunque potueris/34—35・si ...est] si aereus daemon est ita quod amarus et acer daemon non est/38・holtselich] holtlich/39・griszgramet] griszgrāmet (sc. griszgrammet) /42・krymet] krȳmet (sc. krymmet)
- [XIV] 1—2・cum ↓ jam] luna/4・pestilentiam, ↓ <, >aut] aut bella/11・in incremento⁽²⁶⁾] /36—37・pertransivit] pertransit
- [XV] 12・et...aqua] ut...aque (sc. aquae)/15・lenem⁽²⁷⁾] /16・recente tumore alicubi⁽²⁸⁾] recte tumorem alicui
- [XVI] 21・cum...berre⁽²⁹⁾] eum in e. p. bewe/38, 48・aqua] aquā (sc. aquam) /42・quidquam] quid⁽³⁰⁾ (sc. quidquid)/53・et sanitatem] ac s./65・proficere] pfiċē (sc. perficere)
- [XVII] 1—2・meridianae plagae⁽³⁰⁾] meridiana plaga /6・ley⁽³¹⁾] leya/10・aliqua] aliqñ (sc. aliquando) /15・insania⁽³²⁾]
- [XIX] 4・temperatum] semper acrum/19—20・qui...aliis⁽³³⁾] q. cū (sc. cum) t. l. a./29—39・pro ulla causa] prae u. c.
- [XX] 16・de...est⁽³⁴⁾] de aqua nat^aa (sc. natura) e./18・drusae aut orfimae] druse a. orfunas/20・orfimas] orfunas/24・calida] calide (sc. calidae)
- [XXI] 6—7・sordibus ↓ quas] illis/26・et] ac
- [XXII] 5・calckstein] calcksteyn/7—9・quae.....humectatur⁽³⁵⁾]

註

- (1) 「石の書」を選択した背景としては、その思想的側面(中世宝石論)からの資料価値の他に、当書の次のような訳業に筆者が着目している点を掲げておく。—P. Riethe, *Hildegard von Bingen. Das Buch von den Steinen. Nach den Quellen übersetzt und erläutert*, Salzburg, 1979。(以下 Riethe と略称/この訳業の『フュシカ』の従来の訳業に無い特色は、底本Mの他にGを併用し、翻訳という間接的な形ながらMのテキスト改善を試みている点にある。)
- (2) G・「石の書」のテキストについては拙稿「現存最古の写本における聖ヒルデガルト『フュシカ』第四書(石の書)のテキストについて」(広島大学文学部哲学研究室編『シンポジオン』復刊第29号所収)を参照。

- (3) Mの編者はG, Bの存在を知らなかった。本稿ではG, Bとの対照によって初めて明確に指摘される問題箇所も収載する。
- (4) G:—/B: indurate Mの indurati は indurataeとすべきところ。Pの indurare は indurate (sc. induratae) の誤記と見る。
- (5) G, B: ea Mの ista は, Pの該当箇所に対する一つの可能な解釈としてのみ承認され得よう。
- (6) hoīm (sc. hominum) の可能性も否定出来ないが, 写本上ではむしろ hoīni (sc. homini) の読みを有力と見る。因みに 51・et prava.....respuit に対して— G: et quae sunt p. et inutilia homini r. /B: et p. et m. homini r. Gにおける quae sunt の存在が注目される。
- (7) G, B: decorabat Pの該当語におけるnの省略線(と見られる記号)は余分であり, ここでは decorabat が正しい。
- (8) G: s. g. r. (quia.....facient)* ne eam u. movere p. /B: g. r. s. et dyabolum ab ea repellat ne u. eam movere p. 28・ea の呈示は同行の moveri (受動・不定法の語形) が考慮された上での措置と予想するが, Bにおける et.....repellat の存在が注目される。*この部分には文脈を外れたテキストの介在(前掲拙稿参照)。
- (9) G, B: nunc hos nunc illos colores h. Pではテキストの欠落が存在する。Mの mites は nunc とすべきところ。G, Bの文脈は風信子石生成時の空気の色彩の不安定性を述べているが, Bでは更に3—4・calorem (=G)の位置に coloremをとり, 風信子石自体の色彩の不安定性をも述べている。筆者はこのBの文脈に従う。(因みに風信子石の表情〔輝き〕は天候に従って変化すると伝えられていた。—cf. Chr. Meier, *Gemma Spiritalis, Methode und Gebrauch der Edelsteinallegorese vom frühen Christentum bis ins 18. Jahrhundert*, Teil 1, München, 1977, S. 244 f.)
- (10) G: —/B: der proit Pの breit は或るいは broitの誤記か? [XII] 33の der broit (G: derf broth/B: —) の用例を参照。因みに broit という語形例は次のドイツ語辞典において検証される。—L. Diefenbach u. E. Wülcker, *Hoch-und Nieder-deutsches Wörterbuch der mittleren und neueren Zeit*, Basel, 1885, Sp. 301.
- (11) G: —/B では該当処方文の代わりに Item contra fortes febres という表現。Mの fortes に対しては, [X] 6—7の ardentem fiber (=G/B: a. febrem) に倣い, fortem と単数形で読む可能性のあることを指摘する。
- (12) G: aq̄ (sc. aquae)/B: — Pの que は aque (sc. aquae) の誤記と見る。Mでは aquae を挿入すべきところ。

- (13) G, B: feditas P の fetidas は feditas (sc. foeditas) の誤記と見る。foetiditas をとる必要性は特に見出せない。
- (14) G: —/B: cum i. extra se emittit et etiam cum P の該当箇所に対して筆者の採る読みは文脈上も妥当と思われる。当面の文脈は、宝石を口の中に出し入れする際に、氣息が宝石に触れるべき旨を説いている。
- (15) G: aliquid/B: quidquam quidquid(P)→quidquam (M) の変更の妥当性が問題。(quidquid の儘で残す場合、「金以外の何であれそこに在ったら」の意で解釈されることになろう)。
- (16) G: t. n. v. homini ut eum in os s. p./B: t. n. v. quod quis in os s. eum p. 54・et は ut の誤記, 55 における non の挿入 (M) は不要ではないかとする。そして筆者はこの場合の valet を, ut 以下を主語とする非人称的表現の述語として理解している。
- (17) G: v. j. aut p./B: — et(P)→aut (M) の変更の妥当性が問題。因みに P では, jejunos と pransus を et/ac で結んだ表現例が, M・1142B, 1153D, 1179A その他数箇所において見出される。
- (18) G: c. loubroz est in autumpnali t./B: c. f. lau□zz arborum est et in autumpnali t. et cadunt et destruuntur M の laubrorum を laubroz (Mhd. loup-brost に該当?) と改め, est を残した上で文脈上の改善措置が検討されるべきであろう。この場合 destruuntur (M) の主語は folia arborum であると理解される。cf. Riethe, S. 46/M. Lexer, *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch*, Leipzig, 1872–78 (Nachdruck, Tokyo, 1970) [= Lexer], Bd. I, Sp. 1971.
- (19) G: g. colori et veneno r. ac fechnisse/B: glauco id est gelle et veneno ac freissamkeid r. P の feich□sse の原型は fechnisse (G) [Mhd. 動詞 vëhen からの派生^{**}態?] であるとも考えられる。また M では, 7・calori を colori と改め, gelo との間のコンマを同行 et との間に移すべきであろう。
* virgibuisse (M) は正しくは virgibnisse (誤植と見る)。**この予想は Riethe [S. 95] に負っている (cf. Lexer, Bd. III, Sp. 42)。
- (20) G: in m./B: — que は必要無し。que に該当する部分は, molli に続く pane の p を写字生が書きかけて削除した跡と見られる。
- (21) (22) G, B: — (該当処方文欠如) 50–51 間のテキスト (P) は除外されるべきではない。また 56・absque は P の該当箇所に対する一つの可能な解釈ではあるが, なお疑問の余地を残す。詳細は前掲拙稿参照。
- (23) G: ac prudentius/B: et prudentius M では prudentius を脱落させないで, 何らかの形 (本文もしくは脚註の中) で生かすべきであったろうと思われる。

る。

- (24) G, B: — 筆者は 21・interim の内容を「宝石を手許に持っている間に」と解釈し、問題箇所については、P の quia を、21・irrisionem を先行詞とする関係代名詞 qua (女性・単数・従格) の誤記ではないかと見る。quia, quin 共文脈上難がある。
- (25) G: quomodocunque potueris/B: — ここでの問題は poteris (M)/potueris (P) 間の異同。M の poteris の呈示は、27—28・quocunque modo poteris (P: q. p./G: quomodocunque potueris/B: —) の poteris が考慮された上での措置とも予想されるが、このような措置が妥当かどうかはなお疑問の余地を残そう。少なくとも G の対応箇所でも何れも potueris がとられている点に注意を喚起しておきたい。
- (26) in cremendo の他になお incremento と読む可能性も残されていないか? G, B についても両様の可能性を掲げておく (G, B では M 同行の de igne solis との間に et)。但し筆者自身は当面の文脈を「紅玉は太陽の火から(そして)月が蝕から回復する過程で輝きを得る」と理解し、in cremendo の読みに従っている。
- (27) lenis と levis (lēvis/lēvis) の読み分けは慎重を要する。ここはむしろ膚に関する記述として、levem (sc. laevem) の読みを有力と見る(滑滑した、或るいは艶のある〔膚〕の意)。G, B の対応箇所はそれぞれ lenem/levem か?
- (28) G: —/B: rco (sc. recto) tumore B との比較上、M・recente は疑問。rectus tumor (B) の rectus は脹らみの方向性を意味せる語か?
- (29) G: c. e. p. bewe/B: — M の berre は bewe とすべきところ。P の eum in e. p. の評価については筆者はなお慎重を期したい。(P における bewe の他の用例 — cf. M・1146 B—C, 1180 D, 1244 C, 1304 A [belbe → 正しくは bewe])
- (30) G, B: in meridiana plaga P では in の脱落の可能性が指摘される。
- (31) G, B: leya 筆者は金剛石の生成論を Riethe と共に G の文脈に従って理解する (cf. Riethe, S. 64, 96)。6・leyem の呈示は、4, 9・leyem の存在が考慮された上での措置と予想するが、本来のテキストから言えば leya が正しいものと見られる。
- (32) P の該当箇所には一応 insaniam の読みを採るが、その他 in saniam という誤記の可能性も考えられない訳ではない。G: in insaniam/B: — P の前者の読みについて特に言えば、G との比較より P では in の脱落の可能性が指摘される。

- (33) G: —/B: q. \overline{tn} (sc. tamen) t. a. l. est P の cum は tamen の誤記ではないかとする。
- (34) G, B: de aqua nata e. P の natura における -ur- の略字(2)は余分である可能性が指摘される。
- (35) 異同は次の通り。—7, 8· quae]×/7· non]×/7· temperatur]temperetur/9· humectatur] humectantur G: et recta siccitate et humiditate non temperantur/B: —難解な箇所である。7· quae の先行詞を 6· humiditas とし、続く aut nimia siccitas を本文から除外した方が、7· aut 以下の文脈との比較上通りはよいと思われるが(事実 Riethe はそのように訳出している[S. 78]), この aut nimia siccitas はGにおいてもP同様含まれている。(6—7· quia.....est については、G では 6· quia と nimia humiditas 間に aut をとる。)